

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫防除技術情報（第 7 号）の送付について

このことについて、下記のとおりお知らせしますので、御参照の上、防除指導方よろしく願います。イネカメムシは、過去に南予地域で生息していましたが、近年全県で増えつつあるため注意が必要です。

記

情報の内容 イネカメムシの発生と防除対策について

1 予察灯における本虫の誘殺状況（表 1）

- (1) 県内の予察灯（6カ所設置）における最初の誘殺は、愛南町で7月1日に1頭確認した。7月の誘殺は、愛南町では4半旬まで継続して認められたが、他の5カ所では認められなかった。
- (2) 8月以降、愛南町では増加し、西予市を含め、他の3カ所においても徐々に確認されている。

2 圃場における本虫の発生状況（表 2）

- (1) 最初の発生は、6月29日に早期栽培のコシヒカリ（鬼北町）で1頭確認した。
- (2) 7月の調査では、南予では確認されなかったが、東・中予では本田及び畦畔雑草での発生を確認した。
- (3) 8月以降徐々に発生は多くなり、中・南予では8月後半になり発生圃場率が高まっている。特に南予では捕虫網による20回掬い取り調査で20頭以上の成虫が捕獲されるなど発生程度の高い圃場が認められている。
- (4) 8月中旬以降に出穂した水稻に発生が集中しているとみられ、今後は中晩生品種の発生及び被害が懸念される。

3 形態の特徴

成虫は体長 12～13mm、体色は薄い茶褐色、やや長めの楕のような形で、触角は短く紅色をしている（写真1）。幼虫はやや扁平な形状をしている（写真2）。

4 被害の特徴

イネカメムシによる被害は、主に子実粒の基部を吸汁加害されることで斑点米が生じる。特に、出穂期から乳熟期にかけての吸汁加害により不稔粒となり収量を大きく減少させ、また登熟期の吸汁加害では特徴的な斑点米（被害の多くが子実基部）となる。このような被害は、他の斑点米カメムシ類の被害とは異なる特徴である。

5 発生生態

成虫で越冬し、イネ科雑草内で活動しながら7月中～下旬の早期品種の出穂とともに水田に侵入する。さらに、8月中旬から出穂する中生品種や晩生品種の水田に侵入する。成虫の発生密度は出穂後にピークがあり、移動先の水田では盛んに穂を吸汁加害し、葉や穂に産卵する。卵は1週間以内にふ化し、ふ化幼虫は穂を吸汁しながら5齢まで发育し、8月中旬以降羽化する。羽化した成虫（第1世代成虫）はこの頃出穂する品種の水田に移動し吸汁加害し、9月下

頃まで水田内に生息する。日中もある程度歩行活動はしているが主にイネ株内で潜み、夕方になると飛翔活動が活発となる。

6 防除上の注意と対策

- (1) 地域内で出穂の早い品種よりも遅い品種に集中して飛来する傾向があるので注意する。
- (2) 出穂直後の飛来による吸汁加害は不稔籾の発生につながるため、基幹防除である出穂期の防除は重要である。また、その後も発生が見られた場合には追加防除（幼虫発生初期：乳熟期（出穂10～15日後））を実施する。
- (3) 本種の発生には地域的な偏りがあるため、発生時期や発生量に注意し防除実施後も発生を確認した場合には、追加防除が必要となる。
- (4) 本虫を含む大型種のカメムシ類の要防除密度は、穂揃期～乳熟期の捕虫網による20回掬い取り個体数で1頭である。

表1 予察灯におけるイネカメムシ半旬別誘殺数

予察灯 (設置場所)	7月						8月					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
西条市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
松前町	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1
久万高原町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
松山市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
西予市	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	2	3
愛南町	1	2	5	2	0	0	-	-	19	11	18	18

1)愛南町の8月第1.2半旬は欠灯

表2 広域調査におけるイネカメムシの発生状況

地域	調査時期	発生圃場率%	発生地点率%
		(本田)	(畦畔)
東予	7月	1.5	4.8
	8月前半	0	0
	8月後半	1.2	2.1
中予	7月	0.0	2.6
	8月前半	2.2	1.9
	8月後半	7.0	1.8
南予	6月	8.3	0
	7月	0	0
	8月後半	38.7	8.7
県全体		4.2	2.1

1)捕虫網による20回掬い取り調査



写真1 イネカメムシ成虫



写真2 イネカメムシ幼虫